
今日、私が消える。

きよこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日、私が消える。

【Nコード】

N8963B

【作者名】

きよこ

【あらすじ】

私は予知夢を見る。人が死ぬという予知夢。私は私が死ぬ夢を見た。私は今日死ぬのだ。

私が死ぬ夢を見た。

予知夢。初めてそういう夢を見たのはいつだったのだろうか。母に「おばあちゃんが死んじゃう」と泣きついたのは六歳の頃だった。私が覚えている限り、それが初めて見た予知夢だった。

私が見る予知夢はひとつの共通点がある。これまで四回予知夢を見たけれど、すべて誰かが死ぬ夢。その夢を見た日、夢で死んだ人が実際に死んでゆく。夢と全く同じ死因で。

父方の祖母が、母方の祖父が、伯父が、友人が。死にゆく姿を夢で見た。

そして、今日。五度目の予知夢。私は、私が死ぬ夢を見た。

だが、あれを果たして『死』と呼ぶのかどうか、わからない。

倒れた私は、青々と広がる空をぼんやりと眺めていた。空はどこまでも高く、綿あめのような雲はどこまでも白かった。真上から降り注いでくる太陽の光がとてもまぶしくて、私はたまらず目をつぶる。すると世界は真っ白に染まった。私はその白い空間で横たわり、どこからか香る甘い果物のような花の香りをかいでいた。

そんな夢。死んだ確証なんてない。けれど感覚的に認識したのだ。私は死んだ。眠る私をぼんやりと眺める私がいて、その私が眠る私に触れると、そこには確かに『死』がいた。冷たく、弾力を失った肌。その感触はどこかで触れたことがあった。焼肉屋で、父がたのんだ豚足。あの妙にぶよぶよしていそうな、しかし肌の質感が残る脂と肉の塊。あれと夢で眠る私は同じ感触を備えていた。

目覚まし時計が鳴る。毎日毎日鳴り響く耳障りな電子音を止めると、窓の外からのどかな雀の声が聞こえてきた。

私が死ぬという予知夢。私は今日、死ぬことになる。

真上から太陽が見えたということは、私が死ぬのはおそらく昼間。学校があることから考えて、昼休みに私は死ぬのだろう。

死因は？

倒れていたのは確かだ。私はいたって健康で、病気で突発的に死ぬとは考えられない。つまり事故？ 何かしらの事故で死ぬ？ でも血の映像は見えなかった。私は無傷だった。

考えてもわからない。寝癖だらけの髪の毛を思い切りかきむしって、私は飛び起きた。

私は恐ろしいくらい冷静だった。今日の昼休み、死ぬというのにテレビや漫画なら、こういう状況に陥った主人公はあせり、運命を変えようと色々行動を起こすことだろう。

私は素直に運命を受け入れる。達観しているのか、諦観なのか。運命を変えようと抗ったところで、結局は死を迎える。それが定石つまり、なにをしても無駄ということなのだ。

別に自殺願望があるわけでも、死ぬことが怖くないわけでもない。でも、別に生きていたいとも思わない。今死ぬなら、それもいい。

いつも通りに授業を受け、いつも通りに友達と笑い、いつも通りに弁当を食べる。すべてが変わらない。それでも、『死』がすぐ身近にせまってくる。少しだけ、少しだけ怖い。じわりと気持ち悪い汗が脇の下を濡らしている。

いつもと変わらない笑顔の友人が、私の肩を叩いて言った。

「昼休みさ、外行かない？ 晴れてて気持ちいいから」

梅雨で雨が続けていたせいか、久々の晴れが心地良かった。朝方はまだ小雨が降っていたから、学校の玄関の前は湿り気を帯びたアスファルトが黒々としていた。

「やっぱり晴れていいね」

友人が楽しそうに笑う。すぐ近くにいますの友人がとても遠くに感じる。

アスファルトに反射する太陽の光がまぶしくて、目を細めながら歩みだしたその時だった。ぐらりと世界が揺れた。

「危ない！」

友人の叫び声。水たまりから水の粒がキラキラと舞う。

「嘘」

私は小さくそう叫んだ。スローモーションのように景色が変わってゆく。眼前に広がるのは青。誰かが耳のすぐそばで太鼓を叩いたような体を震わす音が、脳髄を駆けめぐる。

なんてことだ。私の死因はどうやらすところんで後頭部を強打するという、なんとも情けないものだったのだ。転んだ場所が悪かった。階段のすぐそば。階段の段差が、ちょうど後頭部を打ちのめした。

目の前に広がる透き通る真っ青な空。ふわふわと浮いている雲は真っ白で、太陽の光線がまぶしかった。夢の通りの死。私は死ぬ。

ふと気付くと、どこからか一定の間隔で電子音が鳴っている。死んだはずなのに。

いや、夢の通りだ。白い空間で死ぬのが私のラスト。つまり、まだ私は生きているというのか。

鼻をくすぐるかぐわしい花の香り。どこかに花がある？

うつすらと薄目を開けてみると、ぼんやりと白い世界が続いていた。違う。白い天井だ。私は私の体から離れ、天井を漂っていた。すぐ下に、私が眠っている。幽体離脱をしてしまったのだろうか。ドラマでよく見る緑色で波打つ線が映ったモニター。そこから電子音が聞こえてくる。私の体には、どうなっているのかよくわからない管がいつぱいついていた。

私は後頭部を打ち、植物状態になったのだ。

また目をつぶり、考える。この状態を『生きている』というのだろうか。

『人は考える葦である』。誰だか忘れたけど、そう言った偉人がいた。考えるという行動が出来なくなった人間は単なる『葦』なのだろうか。

私は永遠に眠り続けるだろう。目覚めることのない眠りは『死』だ。なら、今の私は死んでいる。

私の見る予知夢は必ず当たる。私の死も当たってしまった。ただ、死ぬように生かされる。生きているようで、死んでいる。私は『永眠』したのだ。

『起きなきゃ』

そう思った。死んだはずなのに。永遠に眠ったはずなのに。指先がピクリと動く。

私は重い体を起こした。体のいたるところにあったはずの管は一切なく、白い天井でもない。

そこは、私の部屋だった。

梅雨のために干すことの出来ない布団はじっとりと湿っている気

がする。花柄のカーテンが風に吹かれてそよそよと揺れている。朝方降っていた雨は止み、時折晴れ間が覗く白い雲に覆われた空。

……夢。

夢だったのだ。でも、どこから夢だった？ 日常的な行動を取る夢は現実とごっちゃになる。

冷静だった私。死を簡単に受け入れていた私。体中から汗が吹き出してくる。

私は死の予知夢を見る。今のところ百発百中。そうか。

永遠の眠りという、『死』と『生』の曖昧な狭間に私はこれから堕ちる。

永遠に続く眠りは、世界と私を切り離し、私はもうこの世界に関わることはない。

それを私は『死』と呼ぶだろう。

ゆっくりと布団から這い出る。この制服に袖を通すのも、きっと今日が最後だ。

人はそれを『生きている』と言うかもしれない。『生かされているだけ』と言うかもしれない。

だが、私にとっては『死』でしかない。

抗えない運命が、私を待っている。

今日、私が消える。

この世界から、消えていく。

向かうのは、永劫の夢。

（後書き）

いつかホラーも書いてみたいという願望があります。ですが、読むのは好きですが書くことは出来ません（^^；
なので、ゾクリとするけどホラーではない話を目指してみました。
ご意見感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8963b/>

今日、私が消える。

2010年10月8日15時29分発行